

# 141 西の窪19号古墳



指定 市 史 跡 昭和47年 5 月 5 日  
 所在地 入 沢  
 所有者 小須田 東洋和



西の窪19号古墳は、入沢古墳群の最東端に位置している。入沢古墳群は、千曲川の支流である谷川の右岸にあたる南面した緩斜面に18基が点在し、左岸の扇状地月夜平に1基、岩水に1基と計20基を数える群集墳である。

指定されている西の窪19号古墳は、西の窪の山麓斜面の山林内に所在し、横穴石室、羨道<sup>せうどう</sup>が露出し、墳丘がわずかに残る程度である。規模は、奥壁の幅1.7m、高さ1.3m、側壁は2.3mを測り、付近で豊富に産出する溶結凝灰岩の佐久石を素材にしている。

玄室内は1.7m×2.3mの長方形を示し、玄門に向かってやや開いた形状をとっている。

玄門と羨道の入口部は天井石が残っており、玄室と羨道を結ぶ構造を知る上で貴重な手がかりを示す古墳であるといえる。羨道の規模は、長さ1.9m、幅1mを測り、玄室と共にほぼ原形をとどめている。これ等の規模から推定すると、構築当時の墳丘は、径10m、高さ3m前後を測る円墳であったと考えられる。

入沢古墳群の構築年代は、昭和61年（1986）3月に調査した「五霊西12号古墳」の出土遺物や他の古墳の周囲から採集した遺物、および古墳内出土の既出土遺物から判断して、古墳時代終末期～奈良時代に比定され、さらに平安時代まで追葬されていたことが調査結果から得られている。